

足利 15 代 将 軍 義 昭

森 紀 子

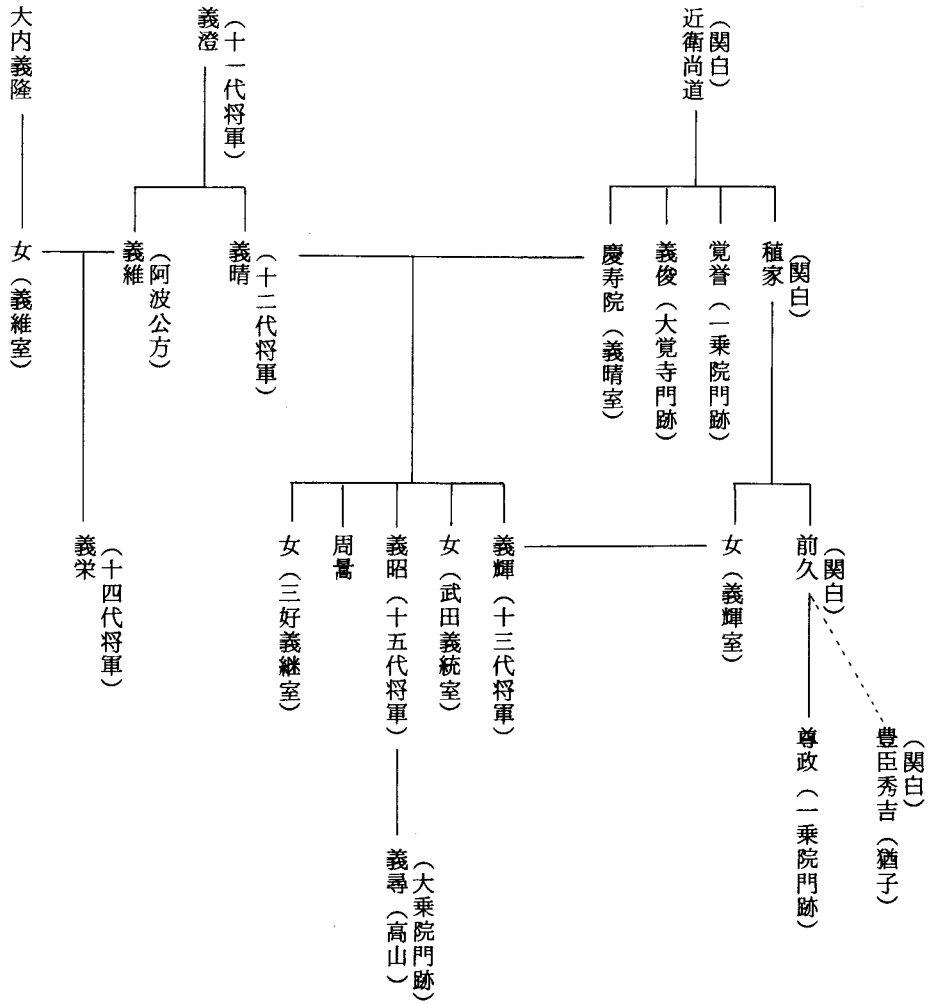
昨年のサン・サン・ヒロシマのイベントのなかに頼幕府 400 年祭がありました。今ひとつ盛り上りに欠けていたようです。頼の住民ですら幕府の存在を知らない人が大多数であればそれも無理のない話です。頼幕府はいわば歴史の本流から逸脱した存在です。歴史が常に勝者の立場から語り継がれたものであれば敗者のそれは抹殺されるか、無視されてきたのも頷けます。歴史の本流から見れば、天正元年に室町幕府は滅亡しました。しかし現実には足利将軍が織田信長に京都を追放されたのち毛利輝元を頼って頼に来ています。将軍としての権威が厳然と威光を放っていたとすれば、やはり幕府の存在を無視するわけにはいかないでしょう。とはいえ流滴の地であれば幕府と呼べるかどうか些か疑問ではありますが……。

そこで足利義昭とはどのような人物だったのでしょうか。又備後とどの様に関わったのでしょうか。既に義昭に関する書籍も幾冊か出版されていますからよく知られていると思いますが、「薄倅の将軍」、「失意の流浪将軍」などと形容されている割には案外恵まれた一生であったのではないかと私は思うのです。私は私なりの見方で将軍の人となりを考察してみたいと思います。しかし最初にお断りしておかなければなりません、ここに書きましたのは論文と呼べるものではありません。私は過去史学を専攻したわけではありませんし、この原稿を書くに当って師事した先生もいません。書き方もまったくの自己流です。それを踏まえて御一読下されれば幸いです。

一 乗院 脱 出

義昭は足利 12 代将軍義晴を父に、関白近衛尚道の娘を母として天文 6 年に京都の南禅寺の館で生まれています。義昭には兄と弟、それに 5 人の姉妹がいたようです。当時足利将軍家は凋落していましたが嫡子以外は格式の高い寺院に預けていたようです。義昭も近衛家の猶子（名儀だけの養子）となって、6 才の時より奈良興福寺一乗院の門跡覚養（母方の伯父）の元へ預けられました。興福寺は平安朝の頃、藤原氏の氏寺として建立されたものです。一乗院と大乘院があり、一乗院は南北朝の頃より近衛家の支配を受けるようになりました。ここで義昭は覚慶と名乗り 29 才まで仏道一筋に精進していました。しかし永禄 8 年 5 月に父亡き跡 13 代将軍となっていた兄義輝が松永弾正久秀や三好三人衆（三好長逸・三好政康・岩成友通）等に弑逆されたことで運命が大きく転換しました。三好一族は覚慶兄弟の従弟に当たる阿波公方の足利義親（のち 14 代将軍義栄）を将軍に擁立しようと画策したのです。母慶寿院と 17 才の弟で北山鹿苑院（金閣寺）に預けられていた周喬も殺されました。京都にいれば覚慶も直ぐ殺されていたかも知れませんが、奈良に離れていたためか殺されるころまではいかず監視付きの身となりました。そこで救出作戦を立てたのが、京都大覚寺門跡義俊です。義俊は慶寿院の兄ですから覚慶にとっては伯父に当たります。そして救出作戦を実行に移したのが、細川藤孝（幽斎）と米田求政（監物）です。一式藤長ものち救出に力を貸したことで感状を受けていますから、この時何らかの形で協力したのでしょう。細川はこの時 32 才、一式もほぼ同じ位の年令だったろうと思います。二人は幼少の頃より 12 代将軍義晴

足利義昭關係系圖



に追待していました。細川、一色家といえは室町幕府が権勢を誇っていた頃の由緒ある家柄です。細川家は3代将軍義満の弟が継いだ足利の支族です。藤孝は別の足利の支族、三淵家の子として生まれましたが、管領細川家の養子となっています。一式家は四職の1つです。しかしこの頃は将軍家と共にこれら名門の家も凋落していました。

細川達は覚慶を還俗させ次期将軍位につける意図を持って、ともかく救出に成功しました。そして一先ず近江油日(滋賀県甲賀)の和田惟政これまさの館へ落ち延びました。永禄8年7月29日の事でした。和田は甲賀の土豪で観音寺城主六角義賢(承禎)の属将です。六角の命令で義輝将軍の供衆として将軍家に仕えていました。六角義賢は義輝より諱を受けていますし、父の定頼は10代将軍義植から観音寺城を拝領していましたから当然覚慶救出に協力したのでしょう。

覚慶は周圀から還俗を勧められ次期将軍となるよう説得されましたが、初めその意志はなかったようです。6才より20数年間仏道一筋で世俗にうとかったはずですから無理ありません。一乗院は格式の高い寺院ですから下剋上の乱世ではあっても俗世間から隔絶した平穏な生活だったことでしょう。この時点では覚慶に将軍となる野心はなく、むしろ中央制覇を目論む周圀の野望の為に利用されたのではないかと思えるのです。世間知らずの覚慶は彼等の傀儡かいらいだったのではないのでしょうか。甲賀の里にある油日寺あぶらひ社に参詣した覚慶が能面を被って『われは油日のくぐつなり』と自嘲したと伝えられています。この事からも覚慶自らが将軍となることを望んでいたのではなかったと思われる。しかし結局は周圀の説得に負けたようです。

伯父の大覚寺義俊の根回しによって越後の上杉輝虎(謙信)が協力してくれることになりました。輝虎は義輝将軍の諱を受けています。覚慶は輝虎に宛てた書状によって始めて将軍位につく事を決意しています。又、武田

晴信(信玄)、薩摩の島津貴久、義久父子、肥後の相良義陽、若狭の武田義統にも書状を出し出兵を促しています。

義昭関係の書籍の中では四職の1つ、京極家との関わりが出てきませんが、私が調査した限りではこの時代でも将軍家とは少なからず関わりがあったようです。近江伊吹山の上平寺城主京極高吉(17代)も覚慶に協力しています。京極は高吉の父高吉の時代に家臣の浅井亮政すけまさに政権を取って代わられた経緯もあり、この頃は伊吹山麓で逼塞ひつまくしていました。従って覚慶に協力するといっても大きな力はなかったようです。

覚慶のこの一乗院脱出は過去あまり大きく取り扱われた事はありません。この時代を扱った映画やテレビドラマでも義昭将軍が主役になる事はまずありません。大抵は端役です。しかし歴史の因果関係という観点から見ると実に重大な出来事だったと思います。覚慶が歴史の表舞台へ踊り出た事によってこれ以後の歴史が急速に変遷しています。好むと好まざるとにかかわらず影響を蒙った人物は多数います。これらの人々の生死と興亡に多大な影響を及ぼすなど、この時点では覚慶自身夢想だにしなかった事でしょう。

一乗院脱出の4ヶ月後、六角義賢の招きで和田館より野洲郡矢島(守山市)に居を移しました。明けて永禄9年2月に覚慶は還俗して義秋と名を改めています。朝廷は義秋を左馬頭に任じ、従五位下に叙しています。しかしその頃阿波公方の足利義親も次期将軍になるべく阿波より京都に向っていました。この矢島において、尾張の織田信長に参陣を促がしたり、上杉輝虎、武田晴信、北条氏政に三家が和睦して協力してくれるよう命じたりしています。この頃六角義賢の子義弼しむつが三好三人衆と通じ義秋を裏切った為に、京極高吉の手引によって一行は若狭へ向いました。

近江より若狭へ

義秋一行は若狭の守護大名、武田義統よしむねが居城としている小浜の後瀬城へ身を寄せました。義統には義秋の姉が嫁しています。後年京極は娘の龍（のちに豊臣秀吉の側室となる）をこの義統の嫡子元明に嫁がせていますから、京極と武田とは親しくしていたのかも知れません。義統は心からの饗応をしたと思われませんが、義秋上洛に手を貸すだけの力はありません。そこで朝倉義景の協力で敦賀の金ヶ崎城へ移りました。

若狭より越前へ

金ヶ崎は朝倉の本拠地一乗谷城の山城です。城主は朝倉景恒です。

その頃阿波の義親は摂津富田（大阪高槻市）の普門寺に着いて義栄と改名しています。そして義秋と同じく朝廷より左馬頭に任じられ従五位下に叙せられています。

明けて永禄10年3月義秋は吉川元春に出雲国の平定を祝した書状を送り、ついでに毛利元就に上洛の為の援助を頼みたいと要望しています。7月には吉川元春と上杉輝虎に参陣することを命じています。しかしなかなか義秋の思惑通りの状況とはなりません。金ヶ崎に来て1年余りの11月に一乗谷へ移りました。義景は安養寺御所と呼ばれた館を義秋の為に新築しています。

一乗谷城には美濃を斎藤道三に追われた明智光秀が寄寓していました。光秀は戦国の武将としてはなかなかインテリだったようです。義秋の家臣細川藤孝も武将としてよりも歌人として優れた人物ですから二人はどこか気の合うところがあったのでしょう。この時を境に光秀と藤孝の友情的な縁が結ばれたのです。義秋はここで朝倉と加賀の一向宗門徒との争いを治め政治的手腕を見せています。この頃ははっきりと次期将軍位に対する野望を持ったようです。それまでは将軍位につく事を渋々宣言はしたものの、寺まいるなどして自分の気持の整理が尽きかね悩んでいた節がありま

す。しかし義秋が折角その気になったものの翌永禄11年2月阿波公方の義栄に14代征夷大将軍の宣下がありました。義秋には相当ショックだったと思いますが、それでも諦めず将軍位を狙ったようです。義秋は秋という字が不吉として義昭と改名し元服式をしています。32才となっていました。

その頃朝倉の嫡子が死亡し義景は落胆の余りすっかり気落ちしました。元々義景は武将というよりは京風の公家文化に傾倒するような文弱であつたらしく、義昭を擁して天下を取るだけの気概が稀薄だったようです。そこで義昭は明智光秀の進言もあって織田信長を頼ることにしました。

美濃より上洛へ

この頃信長は斎藤龍興を攻略し美濃一国を平定していたこともあって快く受入れを承諾しています。義昭は力の強い信長を頼り、結果として朝倉を見限ったのです。美濃へ出立の日義景は病氣と称して見送っていません。やはり自分より信長の方へ乗り変えられた事で気を悪くして見送りに来なかったのでしょうか。金ヶ崎城主の朝倉景恒が近江の国境余吾の庄まで見送っています。ここで義昭はこれまでの待遇に感謝の意を表わし、将来も朝倉を見捨てないとの誓書を景恒に托しています。

今度当国退座之处、忠義思召候。向後身上不可見放候。大蔵卿可申候也。

七月二十日

義昭（花押）

朝倉左衛門どのへ

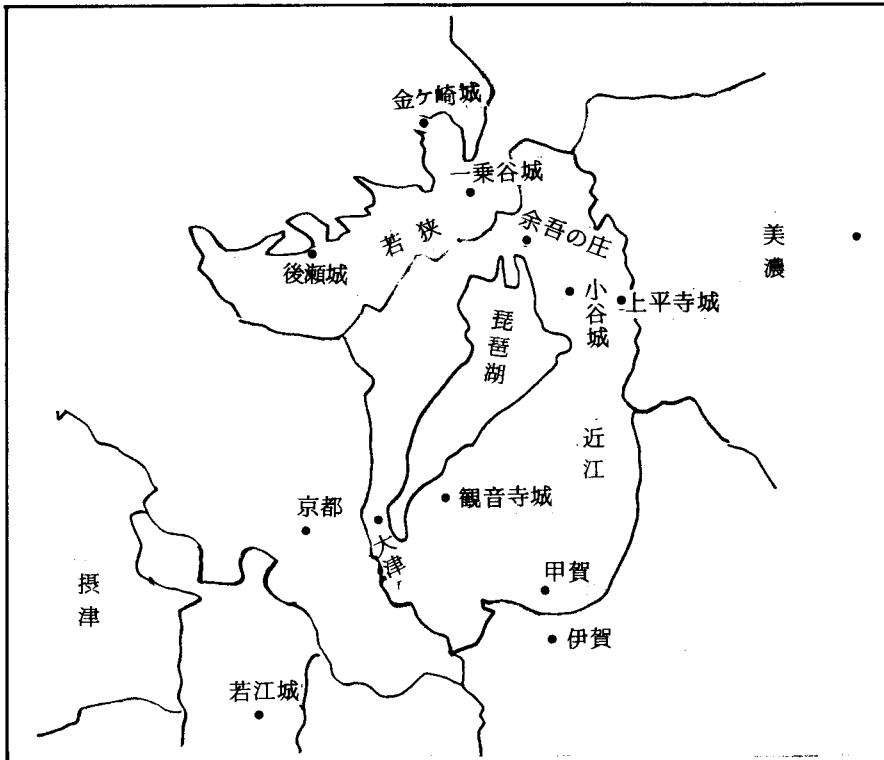
義景はこの書を受け取ったものの気分を害したままだったようです。この事がのちの滅亡へとつながっていったともいえるでしょう。信長の使者が余吾の庄で一行を出迎えています。その中に24才の若き小谷城主浅井長政がいました。途中小谷城へ立寄りしました。長政の妻は言わずと知れた信長の妹お市の方です。当然盛大な饗応があったものと思われま。茶々（淀君）はもう生まれていて2才

になっていたはずですが。

7月26日信長の本拠地美濃の立政寺へ着きました。翌日信長は始めて義昭に謁見しています。8月に入っていよいよ14代将軍義栄に敵対して上洛の途につきました。朝倉に義昭一行に随行し上洛するよう誘いましたが拒絶されました。又途中近江観音寺城六角承禎にも甲賀の和田惟政これまさを使者に立て協力を要請しましたが、やはり拒絶されました。その為信長はこれを攻撃し、六角父子はこれより伊賀(三重県)に敗走しています。しかし伊吹山上平寺城主京極高吉は信長に忠誠を誓い一行に同行しています。

8月26日とうとう義昭、信長一行は入洛することが出来ました。京都を牛耳っていた三好三人衆は勝ち目はないと将軍義栄のいる

摂津へ逃れました。そして数ヶ月後義栄が急死しました。征夷大將軍にはなったものの、入洛することなく1年足らずの名ばかりの将軍よしでした。義栄の父は13代将軍義晴の弟義つな維です。母は周防の大内義隆の娘でしたが、念願かなって栄光の座についたものの所詮は三好三人衆達の野望に利用された傀儡かいらい将軍にすぎなかったのです。ここで松永久秀と三好長慶の養嗣子義継が三人衆と袂を分って降参して来ました。義昭は母や兄弟を殺した二人を誅伐するつもりでいましたが、信長は義昭の意を無視して味方に引き入れました。そして二人に大和を平定させ、自らは戦わずして大和を自分の勢力下に治めたのです。



15代将軍

永禄11年10月8日ついに義昭は征夷大将軍となりました。思えば奈良一乗院を脱出してから流浪3年余りで権力の座についたのです。義昭は将軍となったことで信長に論功として管領職を与えようとしたのですが、信長は断って美濃へ引き上げてしまいました。多分義昭の下で使われるよりも自分が将軍を操る存在でいたかったのでしょう。その後の将軍に対する態度がそれを証明しています。信長は恩賞を辞退しましたが、大津、草津、堺という流通経済の中心地だけは抜目なく掌握しています。その上武家にとって名誉ともいえる「桐」と「二引両」の紋章を受けています。信長は義昭の利用価値を充分知っていたとも言えます。

翌永禄12月2月より信長は再度上洛し、将軍の為の館を二条に造営しました。4・5年を要する大工事を2ヶ月程で仕上げたと当時信長の庇護の下にあったイエズス会の宣教師ルイス・フロイスは書き残しています。信長はキリシタンを容認した事で知られていますが、この時フロイスを信長や義昭将軍に謁見させたのは他でもない甲賀武士の和田惟政だったのです。和田は六角から離反して義昭に仕えていました。和田はのちキリシタン大名として有名になった高山右近の奨めで入信したキリシタンでもあったのです。

この頃毛利元就と豊後の大友宗麟が敵対していましたが、将軍はこれを和睦させようと御教書を出したり、吉川元春と小早川隆景にも大友と和睦するよう勧告しています。しかし講和は実現せず依然として戦闘は続きました。義昭は将軍として御教書を書けばそれが非常に権威があり、自分が立派な調停者たり得ると錯覚していた節があります。将軍にはなったもののまったく威力はなかったのです。それどころか朝廷は将軍よりも信長の方を重要視しました。その為信長は京都に所司役を設けて明智光秀と朝山日乗(日蓮宗の僧侶)に幕府を監視させました。そして将軍に信長

の許可なくして政治活動をしてはならないという意味の五ヶ条の誓約を守らせることにしました。軍事力も経済力もない将軍であれば結局は従わざるをえません。

元亀元年になって信長は朝倉討伐を決め、金ヶ崎城を攻撃しました。度々恭順を促がしていましたが無視されていたからです。ところが妹婿の浅井長政が朝倉方につき、伊賀に敗走していた六角承禎も浅井方につきました。この時京極高吉には浅井長政の姉との間に嫡子高次がいましたが、浅井には味方せず、信長方につき6才の高次を人質に出しています。京極は大永3年に家臣の浅井に権力の座を奪われた怨みもあって信長方についたでしょう。信長側にはその他三河の松平家康(徳川)が味方してくれたものの翌2年になっても勝負はつきませんでした。そうこうしているうちに本願寺光佐(顕如)が全国の門徒に一揆を起すよう命じて信長に宣戦を布告し、状況は慌しくなりました。

翌3年正月に義昭の家臣細川藤孝と上野秀政が意見の違いで衝突しました。上野はまだ義昭が近江矢島にいた頃馳せ参じた父義晴の旧臣です。細川はあくまでも信長に従う事を主張し、上野はこの際信長を討つべきだと主張しました。将軍は朝倉に恩義を感じており、日頃の信長の高圧的な態度に不満を抱いていただけに上野の肩を持ちました。その為細川は怒って洛東鹿ヶ谷に蟄居してしまいました。この時を境に細川は義昭を見限り織田方へ走ったのです。

義昭が信長を敵にまわす気になったのは武田信玄の存在です。信玄の妻と石山本願寺光佐の妻が姉妹という関係もあって信玄は打倒信長を画策したのです。信玄の上洛と呼応して三好義継、松永久秀が将軍方につきました。義継の妻は義昭の妹です。多分義昭が将軍となつてのち妹をめあわせたものでしょう。将軍の裏切りを知った信長は又もや17ヶ条の諫言まことげんをつきつけました。この時はまだ信長に将軍を操るだけの余裕がありました。

将軍、信長と訣別

ついに天正元年義昭は信長に攻撃を仕掛けました。最初は將軍方に有利に転開し、信長は実子を人質に差し出すことを条件に和義を申し入れて来ました。しかし義昭は強気に出てこれを突張ねています。この頃義昭は毛利輝元を右馬頭に任じています。2年前祖父の元就が死んで毛利家の総大将となっていた輝元を自分の味方に引き入れる魂胆があつてのことでしょう。しかし形勢は逆転し、その上頼りの武田信玄が信濃において死亡しました。正親町天皇が仲裁に入り將軍は降伏するよう勧告を受けました。將軍はそれを不服として宇治槇島城でしぶとく信長に楯突きました。多勢に無勢で槇島城は直ぐ落上しましたが、信長は將軍殺しの汚名を着たくなかったのか京都より追放の措置を取っています。この時將軍は2才の実子とその母三位局さんみのつぼねを人質として差し出しています。この子はのち出家して奈良興福寺の大乗院の門跡となっています。

再び流浪の旅へ

將軍は義弟の三好義継を頼り河内の若江城へ移りました。この時側室では春日局のみ従い、その他の側室は將軍の元を去っています。名前が判名している側室には一対局、さこの局、大蔵卿局、小宰相局など何人かいたようですが、ほとんどの出自は不明です。さこの局は義昭が將軍となつてのち信長が奨めた人で播磨守護代、浦上宗景の家臣、宇野上野介の娘という事です。2年後二条昭実の側室になっています。

若江城において義昭は小早川隆景に御内書を送り幕府再興の為に毛利家に手を貸して欲しいと頼んでいます。この書を届けたのは一色藤長です。義昭は若江城を出て堺に移り、そこから吉川元春にも同様御内書を出しています。河内の三好義継は数ヶ月後、義昭を匿まったことで信長に滅ぼされてしまいました。ついで朝倉、浅井も滅ぼされてしまいました。義昭は諦めず毛利に再三援助を求めました。

義昭はもっぱら頼みの綱とした武田信玄に死なれたことによって今度は毛利をあてにしたのです。かつて輝元は義昭の兄義輝から諱を受けています。毛利は織田と天下を争う意志はなかったようですが、信長は強力な毛利が義昭方につくことを恐れ話し合うことを提案してきました。信長方から木下秀吉（豊臣）、朝山日乗、毛利方より安国寺恵瓊えいじゆが出席し堺で会見しました。恵瓊は安芸の安国寺（現在広島市牛田新町の不動院）の住持であり、毛利家の外交僧でもありました。義昭は自分の置かれた立場も考えず信長から人質を要求したため交渉は決裂しました。義昭は毛利に受け入れて貰えず、仕方なく海路紀伊に向い由良の興国寺に滞在することになりました。従臣の中には奈良一乗院からずっと行動を共にした一色藤長もいます。春日局も一諸です。これまで細川藤孝のように信長の勢力の前に義昭を見限った者は多数います。和田維政はこの時すでに死んでいます。義昭を甲賀において匿まった功により芥川城（大阪高槻市）を拝領していましたが、信長方に攻撃され討死していたのです。

由良の興国寺へ落ち延びたのは天正元年11月の事でした。興国寺はその昔3代將軍義満、8代將軍義政の寄進を受けた足利ゆかりの寺です。ここで義昭は帰京出来るように各地の大名に斡旋を頼んでいます。武田勝頼、上杉謙信、北条氏政、徳川家康、島津義久、河野通直などです。しかし結局思惑は外れ、2年余りここでの生活を余儀なくされました。

備後における義昭

天正4年ついに毛利家が受入れを承諾した為、備後の鞆の浦へ向けて船出することが出来ました。鞆の浦へ着いたのは2月8日の事でした。この時義昭は丁度40才でした。ちなみに輝元はまだ24才という若さでした。義昭に随行したのは春日局、真木島昭光、上野秀政、武田信景、小林家孝、曾我晴助、六角藤堯、春阿弥、畠山昭賢、柳沢元政等です。

しかしこの随臣の中に何故か一色藤長の名前が見えません。一色は足掛11年義昭に近待しています。何故頼へ同行しなかったのでしょうか。奥野高広氏の著書によると一色に後日来るようにとの命令が出されましたが、遅れて参上し義昭の不興を蒙ったと書かれています。由良では一色の供奉に対して義昭が感状を与えています。その後二人の間で何か確執があったのでしょうか。備後での生活には一色よりもむしろ真木島昭光や上野秀政の方が義昭側近として活躍していることは残された古文書からも歴然としています。真木島は最後に信長と戦った宇治横島城主でした。上野は細川藤孝と意見の対立をして細川を結果的に織田方へ走らせた人物です。

義昭一行は頼の浦において小松寺を仮の館としたようです。小松寺は現在沼名前神社に隣接した古刹です。平重盛が創建した寺ですが建武の頃足利尊氏がこの寺で北朝の光厳上皇の院宣を受取った、いわば足利家ゆかりの寺でもあります。

当時頼は小早川隆景の配下となっていました。因島の村上水軍、村上新蔵人吉充よしかつの弟祐康すけやすが義昭の警護に当たりました。安国寺恵瓊は頼の安国寺の住職も兼ねて毛利家や義昭の為に外交手腕を振るっています。

義昭の居館がどこにあったか現在では、はっきりとした事は分りません。城山の北西とも東とも推察されていますが、頼在住の森田龍児氏は城山の東、のちの福島正則時代の頼城代大崎玄藩の家敷、申明帝跡がそれではないかと推定しておられます。ともかく新居には毛利麾下の武将がこぞって献上品を持参して將軍に拝謁したようです。これに対する礼書が小早川、吉川、平賀家などに残っています。

この頃毛利と織田は表面上は交友関係を装っていましたが、裏面では織田が尼子の殘党を味方につけていた事や本願寺顕如より毛利に援助を求めてきた経緯もあって、ついに毛利は信長との戦いを決めました。元就に天下

統一を望んではならぬと戒められていたにも関わらず輝元が義昭を備後に受け入れた事によって否応無く天下を争う事になったのです。当然の事ながら義昭は喜び、直ぐ毛利の属將達に忠戦の功に励むよう御内書を送っています。山内新エ門尉隆通、山内刑部少輔元通、熊谷兵庫頭高直、熊谷次郎三郎元直にあてた御内書が残されています。これに対して熊谷元直が義昭の御内書に対してどう対処するか輝元に尋ねています。輝元は將軍の意志に従うよう示唆しています。たとえ將軍直々の命令でも毛利の属將達は輝元の指示のもとに行動したものと思われます。それだけ將軍の權威は失墜していたのかも知れません。7月に石山本願寺へ村上水軍率いる毛利軍が織田方の水軍を取り武器や兵糧米などの搬入に成功しました。これに慌てた信長は翌5年羽柴秀吉(豊臣)に先鋒軍の大將として播磨へ出陣させました。これ以後毛利と織田は摂津、播磨、備前、備中、美作、伯耆、因幡などで戦いを繰り広げたのです。

義昭が頼に落付くに従って頼へ馳せ参じて来る幕臣も増えてきました。そこで幕臣の扶養に困窮したのか義昭は度々知行地を毛利に要求しています。しかし毛利も織田との戦いで自分の属將達に与える知行地にも困窮してそれどころではありません。それに毛利は備前の宇喜多直家や伯耆の南条元統らに裏切られ不利な条件で織田方と戦っていました。その為毛利は將軍を援助する為に余分な出費に困り防長2ヶ国に將軍の滞在費用を課した程です。そこで義昭もやむを得ず家臣の何人かを毛利の属將の元へ仕官させています。伊勢左京亮を平賀新四郎元相の元へ、一色中務少輔(藤長とは別人、昭孝か?)を山内隆通に預けています。又義昭は神辺城を要求しています。神辺城主杉原盛重は毛利の有力な属將で尼子討伐に勲功があり、いかに將軍の望みでもこれは実現しませんでした。そこで神田惣四郎元忠が津之郷に毛利より拝領していた土地を將軍に献上しました。その見返りに將

軍は神田に白傘袋、毛氈の鞍覆の免許を与えています。その上幕府の外様衆に任命しています。神田のはちに吉川元春の次男元氏の娘を娶ったことで周防の三浦を名乗り三浦元忠と改名した人物です。神田の他にも將軍は数年のうちに次々と外様衆にしています。熊野の一乗山城主渡辺民部少輔元、熊谷信直、村上祐康などです。渡辺氏の居城一乗山城と鞆が近距離にあるところから將軍は渡辺家菩提寺の常国寺へ度々行った事があるようです。常国寺には現在將軍の遺品も伝えられています。將軍と渡辺氏は深い関わりがあり房、景元と3代に渡って白傘袋、毛氈の鞍覆を免許されています。

將軍は津之郷の土地を神田元忠より贈与されたことによって鞆より移転しています。古文書のほとんどが年欠なのではっきりとした時期は分かりませんが、福山市史や広島県史ではこれが天正10年頃と推定しています。それに伴って小早川より郷分、神島、神村、佐波、長和等の一部を所領地として贈与されました。そこで將軍は郷分に家臣小林家孝、神島に真木島昭光、神村に石井清信らを住まわせました。將軍の館はのち豊臣秀吉が立寄った事から大閤屋敷と呼ばれた所ようです。

天正10年備中高松城が羽柴秀吉に包囲され城主清水宗治が自刃しました。その2日前信長が明智光秀に弑逆されたにもかかわらず、羽柴と毛利の講和が成立しました。將軍は信長が死んだ事で直ぐ帰京出来るものと思っていたようですが、状況はなかなか複雑でした。秀吉の家臣黒田孝高や蜂須賀正勝に働きかけたり、柴田勝家や徳川家康にも連絡を取り入洛して返り咲く為の画策をしています。柴田勝家は毛利を巻き込んで秀吉軍を夾撃するつもりで真木島昭光に協力を頼み毛利の出兵を促しています。これに対して柴田側には吉川元春が交渉に当り、秀吉側には小早川が当って、勝った側につこうとする毛利の態度が見えます。

結局秀吉の天下となって後、四国平定に活

躍した小早川は伊予を拝領しましたが、その一部を義昭は贈与してくれと度々要求しています。義昭の自分の置かれた立場を考えない厚かましさにさぞかし小早川は辟易したのでしょうか。この話は実現しなかったようです。

天正13年秀吉は征夷大將軍になる野望を持っていた為、義昭の猶子になることを申し入れましたが、まだ義昭には將軍位に対する未練があり当然の事ながら断っています。仕方なく秀吉は近衛前関白前久の猶子となり関白となりました。

天正15年関白となった秀吉は九州平定に取りかかるべく自ら出陣しました。途中備後に立寄り赤坂の田辺寺にて義昭の饗応を受けましたようです。義昭は九州の島津義久に一色昭秀を使者に立て、秀吉との和議を勧告し成功させました。その結果秀吉は九州からの帰途再び義昭の館へ立寄り快よく義昭の帰京を承諾しています。義昭もこの頃はさすがに年のせいから將軍位に執着せず豊臣政権下で帰洛して余生を静かに送ることを考えたのでしょうか。元家臣だった細川幽斎(藤孝)も九州の帰途立寄っています。帰京について打合せをしたのかも知れません。細川は聡明な人物だったらしく足利、織田、豊臣と上手に世渡りをしています。二人の恩怨もすでに10数年の歳月が流れ、打ち解けて話し合ったものでしょうか。まもなく義昭は村上水軍に護衛され鞆の浦より海路大阪に着き、次いで入洛を果しています。天正15年秋の事です。

家臣の一族の何人かはこの備後にそのまま土着したようです。余談ですが時代はぐっと下って、菅茶山の家系図に菅波家初代に畠山五郎右衛門道元の名前が見えます。菅波家所伝によると道元は義昭に従って鞆に來た人物で菅領畠山の直系と伝えられています。毛利家文書の中に義昭の隨臣畠山昭賢の名前がありますが、これが道元と同一人物なののでしょうか。菅茶山の先祖が義昭の家臣かどうか、確証はありませんが、そのような伝承がある

ということはやはり義昭の家臣の中には備後に土着した人間がいたといえるのかも知れません。

入洛その後

12月義昭は將軍職を正式に辞任しました。そして明けて天正16年1月出家しました。道号を昌山、法名は道休です。秀吉より河内国内1万石の知行を与えられ、朝廷より准三宮の待遇を与えられています。にもかかわらず昌山はここで又厚くましくも小早川が九州平定の褒賞として拝領した築前、築後の一部をくれと要求しています。その結果かどうか分かりませんが、築前の一部3千石の安国寺恵瓊領を手に入れています。その上かつて小早川より贈与されていた沼隈郡長和(瀬戸町)の土地を管理する為、柳沢元政を下向きさせています。柳沢は毛利の家臣ですが天正元年より紀伊の興国寺の將軍の元へ派遣されたお目付役です。昌山は出家してもなお欲深であったようです。

毛利の属將達は昌山が帰京してのちも、品物を献上して敬意を払っています。本郷大場山城主古志新十郎も義理堅い人物だったらしく古志家文書に義昭の家臣上野秀政の礼状が残されています。古志は始め尼子の属將でしたが、のち毛利方についた、いわば外様です。それゆえ古志が毛利や將軍に対してかなり気を使っていたらしい事が分ります。

文禄元年秀吉は朝鮮出兵を決め自らも肥前名護屋の本陣で指揮を取っています。昌山は出家した身でありながら^{しやぼつけ}娑婆氣を出し秀吉の前馳^{まきか}を務めています。文禄2年9月9日に小早川隆景にあてた見舞状を最後に昌山に関する文献史料を入手出来ないの定かではありませんが、慶長2年腫物の為死亡したといっています。享年61才でした。死亡した場所を京都とも大阪とも或いは備後の鞆の浦であったとも伝えられています。鞆で死亡したとすればそれなりの史料がこの備後に残されて然るべきですが、まだそれに関する確かなもの

は見つかっておりません。しかし細川家記に記載されているらしい(私はまだ見ておりません)鞆死亡説はあながち根拠がないとは断言出来ません。備後に住む私に取っては当然この説に魅力がありますが、今後の調査研究に期待を持ちたいと思います。

ともかく昌山の葬儀は嵯峨野にある等持院で行われました。ここは初代尊氏以来の足利累代の菩提寺です。葬儀には旧臣達やかつての側室、それに奈良興福寺大乘院門跡となっている昌山の長子義尋もかけつけました。^{よしの}義尋は天正元年、2才の時織田信長の元へ人質に出されていた人物です。

義昭は生涯正室を持たなかったようです。最後まで行動を共にしたのは春日局です。この女性が実質的には正室のような立場であったようです。備後滞在中に熊谷信直が年始の祝儀を春日局にも贈っていることから正室として遇されていたのではないかと思います。しかし出自やいつ側室になったのかは不明です。義昭関係の史料の中で何人かの側室の名前が出てきますが、そのほとんどは不明です。側室の中ではこの春日局はかなり実力があったようです。小早川隆景の書状からも推察出来るように発言力も大きかったようです。家臣達にもあれこれ口出しをしたり、指図していた節があります。従って義昭にも多大の影響を与えた女性ではなかったかと想像されます。この春日局に関する史料がないのは大変残念な事です。

私は冒頭に義昭の生涯は案外恵まれていたのではないかと書きました。人それぞれに感じ方や見方が違うと思いますが、私が思うには義昭は本来ならば將軍になれる立場にはなかったのです。兄の義輝將軍が殺されなければ当然還俗もなかったはずですし、14代將軍となった義榮が病死しなければ義昭が將軍になれたかどうかとも疑問です。運良く將軍となった義昭は流浪の間にも將軍家の権威の価値を上手に使って、ともかく61才の天寿を全うしたのです。晩年の義昭は出家している

にもかかわらず喜々として秀吉の前馳を務めるなど足利将軍としてのプライドなど、どこ吹く風の鈍感さです。案外目立ちたがりの出たがりな幸せな晩年だったのかも知れないなと思うのです。

最後に私が義昭将軍について調べた事はまだまだ不十分です。史料収集の不備や間違いなどがあるかも知れません。どうか先輩諸氏にそれらを指摘して頂き御教示願えれば幸いです。

参考文献

広島県史、福山市史、福山志料、備後古城記、九州道の記、寛政重修諸家譜、毛利家文書、小早川家文書、吉川家文書、山内首藤家文書、古志家文書、三浦家文書、平賀家文書、熊谷家文書、村上家文書、渡辺家文書、上杉家文書、島津家文書、黒田家文書、滋賀県史、福井県史、近江国坂田郡志、東浅井郡志、江源武鑑、奥野高広著「足利義昭」、その他



足利将軍歴代の寿像を祭る靈光殿・等持院